京都芸術センター通信
KYOTO ART CENTER 京都芸術センター
JULY 2020 07
VOL.242
発行：京都芸術センター　2020年6月20日

黒川岳《Animalizing Object (gamelan)》2019　撮影：井上嘉和　提供：京都市立芸術大学

京都芸術センター20周年記念事業

展覧会『ニューミューテーション #3 菊池和晃・黒川岳・柳瀬安里』

菊池和晃《円を描くI》2020

外出自粛期間は、私たちに自分自身のこと、そして日常というものを振り返る時間をくれました。それは、自分と他者との関係性、社会の中での自分を強く意識させる時間でもあったと思います。自分の行動が他者に影響を与えること、他者の行動が自分に影響を与えること、その仕組みや結果に目を向けることは、創造するにも鑑賞するにも想像力が不可欠である芸術にとってはプラスに働くのではないかと感じています。もちろん、ねたみや嫉みといったネガティブな感情も想像力の産物です。しかし、利他的な行動原理が、このウイルスの拡大を防ぐ要因のひとつであったのなら、私たちは未来に少し期待してもいいのではないでしょうか。

本展は、その期待を共有できる場にしたいと考えています。出展作家の3名は、自分の身体を通して世界とのコミュニケーションをはかりながら、作品を生み出すことを試みています。そこから発せられる生命力には、ある種の希望や気づきが内包されています。正直に、自分の気持ちや気づいてしまった違和感に向き合うことは、表現をする人にとっては特に重要なプロセスです。しかし実際には、自分の内面を見つめ、表現を通して社会との接点を探ろうとするとき、思った以上の痛みや恐怖が伴います。そこに真摯に向き合おうとしているという点で、彼らの作品には、大きな本質的な魅力があるのではないかと感じています。

不安定でありながら、大きな転換期でもあるウィズ・コロナ時代にあって、自分自身の肉体をもって解を探ろうとする彼らの行為とそこから生まれる表現、向かう視線の先を探りたいと思います。

山本麻友美（チーフプログラムディレクター）

「ニューミューテーション」とは
アーティストとしての活動を始めて5年未満の若手作家を取り上げる企画。

京都芸術センター20周年記念事業
展覧会『ニューミューテーション #3
菊池和晃・黒川岳・柳瀬安里』
会期：7月11日（土）－8月30日（日）
10:00－20:00
※8月14・15日休廊、入場無料
会場：ギャラリー北・南、他
出展：菊池和晃、黒川岳、柳瀬安里

［関連企画］
パフォーマンス
会期中に開催予定です。
※日程等詳細はウェブサイト、SNS等でお知らせします

Profile

菊池和晃（きくち・かずあき）

1993年京都府生まれ。2018年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻構想設計修了。身体と機械、個人と社会、アーティストと美術などそれぞれの関係性や連動性をテーマに美術史から引用したイメージを生産するマシンを制作する。また制作したマシンを使用しパフォーマンスなども発表している。近年の展示に、『Kyoto Art for Tomorrow 2020―京都府新鋭選抜展』（京都文化博物館、2020）で優秀賞を受賞、『Muscle』（The Third Gallery Aya、大阪、2019）などがある。

黒川岳（くろかわ・がく）

1994年島根県生まれ。2016年東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業、2018年京都市立芸術大学大学院彫刻専攻修了。物や環境と身体との関係に着目し、彫刻やパフォーマンス・音楽・映像などの作品を制作している。近年の活動に、プロジェクト『思い立ったが吉日』（ヴォイスギャラリー、京都、2020）、『船／橋 わたす 2019』（奈良県立大学、2019）、『Kyoto Art for Tomorrow 2019―京都府新鋭選抜展』（京都文化博物館、2019）などがある。

柳瀬安里（やなせ・あんり）

1993年埼玉県生まれ。2016年京都造形芸術大学美術工芸学科写真コース卒業。身の回りの出来事を出発点とし、それが何なのかを考えるためのひとつの方法として作品を制作している。知ったかぶりすることなく反応することを大切にしたいと思っている。近年の展示に、『Gallery selection: Photographs』（ギャラリー小柳、東京、2020）、『現在地：未来の地図を描くために［1］』（金沢21世紀美術館、石川、2019）などがある。

柳瀬安里《線を引く》2015－2016

大前粟生「風景の時間」
神馬啓佑「夕闇と未明のための習作」
特別企画 第3弾

この数ヶ月は激動で、しかし時間が止まっていたようでもありました。情報も状況もどんどんと流れ、気分もそれぞれに変化している中で、ふとした瞬間にどんな景色をみるのか、「風景」をテーマに2名の作家に作品を依頼しました。

神馬啓介の「夕闇と未明のための習作」は、自室を撮影した写真作品です。中央のドローイングは、あてもなく紙と木炭を使っていると知っている形に近づいていき、結果的には自らの身体とよく似たものになったそう。それは最近失われがちであった、考え事をしながら歩くとき周りには判然としない景色が流れていて、何かの拍子に急に焦点が合うような感覚にも近かったと言います。

大前粟生の書き下ろし作「風景の時間」では、目の前の風景という一見「いま・ここ」と分かちがたいものの中から、外に向かってのびている時間にのり、そこで別の風景をみます。

ぼんやりした靄(もや)の中から体感的にあぶり出される風景や、はっきりとした風景から軽やかに飛び出す様、私たちそれぞれがみる景色や身のこなしを、自身で大切にしていきたいものです。

Profile

神馬啓佑(じんば・けいすけ)
1985年愛知県生まれ。2011年京都造形芸術大学大学院芸術研究科表現専攻修了。主な個展に『当然の結末#2(鑑賞と干渉、言語能力、円周軌道)』(Gallery PARC、京都、2018)、『所有物について』(BLOCK HOUSE、東京、2017)、グループ展に『蘇生と塑性』(ARTZONE、京都、2018)、『肉とヴェール』(京都芸術センター、2016)、『スピリチュアル イマジネーション』(LIXIL ギャラリー、東京、2016)など。

大前粟生(おおまえ・あお)
小説家。1992年生まれ。京都市在住。著書に『のけものどもの』(惑星と口笛ブックス)、『回転草』『私と鰐と妹の部屋』(書肆侃侃房)、『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』(河出書房新社)。フィルムアート社のウェブマガジンかみのたねで『〇〇の日の話』連載中。

左)神馬啓佑《夕闇と未明のための習作》2020　撮影:前谷開

OPEN CALL
[募集]

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 事務局インターンシップ募集
京都発の国際舞台芸術祭「KYOTO EXPERIMENT」の運営事務局でのインターンシップを募集します。国内外にネットワークを持つ舞台芸術祭の運営現場で、準備から終了までに携わる長期実践型プログラムです。12月－3月は事務局研修と平行して、事務局運営、舞台技術、広報宣伝、3コースに分かれた実践研修を行います。
●研修期間：2020年9月中旬－2021年3月末 ●応募方法：公式ウェブサイト(https://kyoto-ex.jp)をご確認の上ご応募ください ●締切：8月3日(月)〔必着〕 ●問合せ：KYOTO EXPERIMENT事務局 TEL：075-213-5839(受付時間：平日11:00－17:00) E-mail：info@kyoto-ex.jp
[事前説明会]
●日時：7月14日(火)17:30－18:30(オンラインで開催予定) ●申込：公式ウェブサイト内の申込フォームからお申込ください

TICKET
[チケット]

第258回 市民狂言会・令和2年度年間席札
●日時：8月19日(水)開場18:00 開演19:00 ●会場：京都親世会館(左京区) ●演目：蝸牛、骨皮、太刀奪 ●出演：茂山七五三、千三郎、千五郎 ほか ●料金：前売3,000円 ※全席指定 ●チケット取扱：京都芸術センター、チケットぴあ(Pコード：502-282) ほか ※年間席札11,000円(限定100枚)は京都芸術センターにて取扱 ※7月10日(金)より販売
●主催：京都市

風景の時間

大前粟生

きた、と思った。

前からひとが歩いてくるだけで不安だった。まだ緊急事態宣言が出たすぐのころだった。散歩していた。とにかく免疫力を上げたかった。京都御苑と鴨川沿いを一日に何キロも歩いた。ひとがやってくると、すれちがわないために、舗装された道をそれて繁った草のなかを進んだ。他のひとも私と同じようなことをしていた。ひとが踏んでぺしゃんこになった草の上を、まただれかが通っていく。そこだけ一時、草花が伸びにくくなった。どんどんひとが通り、草が抉られて土肌が見えはじめる。そうやっていくつもあたらしい道ができたが、成長する植物にすぐに覆われていった。

ここ二か月ほどは、出来事が起こりすぎてうまく記憶が働かなかった。閑散とした街で鳥は妙に人懐っこく、犬はすべての犬がいつも以上にきらきらとかがやいていた。インターネットを見ていると不安でたまらず、不安が大きければ大きいほど、屋外で散歩をしているときの春ののどかさはたまらなかった。身の回りの多くがイレギュラーだった。そんななかで、植物は私の時間をはかってくれた。伸びる、刈られる、咲く、枯れる、目に見えるわかりやすい変化は、不安な方向にも安心の方向にも私の心が動きすぎないように淡々とリズムを重ねることのできる事実だった。

京都御苑にある明るい緑色のモミジの葉を見ていると、私の心のなかにはいまこの春よりも、やがて訪れてモミジを紅くする秋の方がつよくあった。別の季節には別の姿を見せる植物たちは、時間をここではないところへ逃がしてくれるものだった。心細さは風景に破れ目を作った。風景は風景が常に内包している変化を飛び出させ、なによりもはっきりと目の前にある未来になった。それはなによりも信頼したくなる《時間》だった。《時間》に触れていると、じっと見ていると、涙が出て止まらないのだった。言葉にしてしまうと本当さが減るようではあるけれど、風景の《時間》を、そのシステムと結託するように心の内に作るとき、むかしのひとが和歌を詠むときの感覚が自分の身体のレベルでよくわかった。

小説を書いていると、たとえば一文のなかで何年も経ってしまうということがある。自分の創作の癖のようなものかもしれないが、ちょうどこの文くらいのごく短い小説ほど、時間の跳躍が起きやすい。それは私には安心することだった。いまがつらくても、高速で別の風景を持ってくることができる。短さのなかによろこびも悲しみも圧縮することで、その感情、その時間にとどまらないでいることができる。淡々とすることができる。

ロームシアター京都 × 京都芸術センター

U35創造支援プログラム“KIPPU”

中川裕貴『アウト、セーフ、フレーム』

新型コロナウイルスの影響で長らく舞台作品の上演が途絶えていましたが、久しぶりの発表をむかえます。制作のためのスタジオを京都芸術センターが提供し、発表のための劇場をロームシアター京都が提供することで、スケールアップした作品の創出を目指すプログラムである“KIPPU”。2020年度は3団体が採択され、7月に中川裕貴、12月に「スペースノットブランク」と「シラカン」が公演を行います。

チェロの演奏家として、京都芸術センターでの公演や、KYOTO EXPERIMENTにおけるクロージングイベントでのソロライブ、また演劇やダンスなどの他団体に幅広く楽曲・演奏提供を行う中川裕貴さんに、今回の上演についてお伺いしました。

――この規模（サウスホール＝約700人収容）での公演は初めてとのことですが、今どういったことを考えていますか？

当初この公演はもう少し小さな会場（ノースホール＝約150人収容）での開催予定でしたが、コロナの影響でこのようなかたちになりました。個人的にはより「コンサート」の側面を強めながら、その中で自分なりの表現を行おうと考えています。今回はソロ演奏に加えて、バンドや俳優と共演する場面、またチェロを使用した自動演奏の開発や、この公演のための特別なサウンドデザインなど、複数の要素を持った多面的な作品を組み立てようとしています。

――コロナで劇場の客席数を減らしたことで、作品への影響はありますか？

僕の音楽はみんなで肩を組んで聴くようなものでもないので、客席同士に間隔があることについては、ある意味で望んでいたかたちかもしれません。それは自身の活動が音楽との「距離」について考えていることにも関係しています。チェロの生演奏とは別に在るスピーカーからの音（生音が増幅されたものであったり、ループされた音）や俳優の存在、自動演奏、音や楽曲を指し示すテキストなどが、その「距離」を生み出すと考えています。演奏する行為と実際に空間に現れる音が、ズレたり距離を持ったりすることに、観客それぞれが自分なりの面白さを見つけてくれたらと思います。

――中川さんには独特の距離のつめ方や置き方がありますよね。

大学院まで演奏と併行して聴覚や音響心理学を研究してきたことが関係しているかもしれません。投げかけている内容と、全然違うところでデータを取っているような。真正面からは何も与えようとしないのに、気が付いたらどんどん近づいているみたいな。言い方は良くないですが、観客を被験者みたいに扱っているところがあるかもしれないです。でも個人的には被験者も楽しめる実験をやっていると思っていますよ（笑）。

――今回の『アウト、セーフ、フレーム』、どのような作品になるのでしょうか？

演奏という行為から、音楽が立ち上がるあいだには、音や音楽そのものだけではない様々な現象や運動、イメージが関係していると思います。先に挙げた今回トライする複数の要素が「楽曲」のもとに集まり、今、この時にできるコンサートの「かたち」から、音楽や私たちの想像を大きく開く作品になればと考えています。

水に飛び込んだ瞬間に、自分の輪郭がはっきりわかるように、変化する音の世界が、それぞれの観客とどのような関係を結び、どのような瞬間を奏でるのだろう。コロナを超えて、舞台作品ついに開幕。あっ、アウトッ！セーフッ！フレーィムッ！！箕浦慧（アートコーディネーター）

中川裕貴『アウト、セーフ、フレーム』
日時：7月31日（金）19:00
8月1日（土）13:00／19:00
8月2日（日）13:00
会場：ロームシアター京都 サウスホール
料金：一般3,000円、U25 2,000円
高校生以下1,000円
チケット取扱：中川裕貴ウェブサイト、ロームシアター京都ウェブサイト

KAC Performing Arts Program 2018 / Music
中川裕貴『ここでひくことについて』
photo by Takuya Oshima

Profile

中川裕貴（なかがわ・ゆうき）
演奏と演出をチェロ／電気／適当な録音を使用して行う。演奏行為とそれによって現れる音のあいだに在る「距離」を測ること、また「演奏をしながら自身がそこ／ここでどのように存在するか」を問うこと（またその顛智）をテーマとする。近年の主な活動に『ここでひくことについて』（京都芸術センター、2019）などがある。

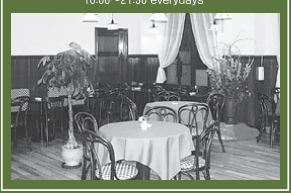
中川裕貴さんの過去の演奏動画はこちらから

ロームシアター京都×京都芸術センター“KIPPU”2021年度参加団体募集
公演日程：①2021年7月 ②2022年2月
支援内容：京都芸術センター制作室での制作（1－3ヶ月）、ロームシアター京都ノースホールでの上演、アートコーディネーターによる制作サポート、広報協力、批評家による批評文
応募方法：詳細は近日中に京都芸術センター、ロームシアター京都のウェブサイトにて発表
募集期間：7月20日（月）－9月11日（金）
主催：京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

京都芸術センターは、
2020年4月に開設20周年を迎えました！
テーマは“We Age”
（ウィー・エイジ）
（ロゴデザイン：松本久木）

最新情報はウェブサイトでご確認ください。
公式ウェブサイト | http://www.kac.or.jp
kyotoartcenter　@Kyoto_artcenter　@kyotoartcenter

Since 1971
MAEDA'S COFFEE
KYOTO ART CENTER 1F
MUROMACHI, TAKOYAKUSHI
NAKAGYOKU, KYOTO
TEL075-221-2224
10:00~21:30 everydays



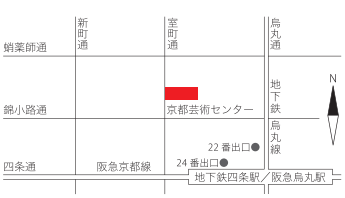
京都芸術センター叢書 二
「伝統芸能ことはじめ」
小林昌廣 著　定価3,520円（税込）
京都芸術センター窓口、もしくは
下記ウェブサイトよりご注文いただけます。
http://www.kac.or.jp/shop/

京都芸術センター
KYOTO ART CENTER

交通案内
●市営地下鉄烏丸線「四条」駅／阪急京都線「烏丸」駅 22番出口・24番出口より徒歩5分。
●市バス「四条烏丸」下車、徒歩5分。

開館時間
●ギャラリー・図書室・情報コーナー・チケット窓口　10:00－20:00
●カフェ（改装工事のため当面の間閉店）
●制作室、事務室　10:00－22:00

休館日　12月28日から1月4日
※設備点検のため臨時休館することがあります



〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
TEL：075-213-1000　FAX：075-213-1004
E-mail：info@kac.or.jp

指定管理者：公益財団法人京都市芸術文化協会